



增鏡五

增  
775  
88



門4曾4  
775  
88

第十二



正應元年三月十九日宮廳にて御即位ありこの  
禊香園院乃師志左持杖とて関白とておとす一記  
そのうち近清殿家奉又九條左大臣教忠教子持杖  
又近清殿かつりなると始ひて程後小親新園院と  
いふとげうりり終ふ杖り并北門をいふは新院  
ときこゆまば太上天皇みよりと世ふおとす一記  
かつめつり一と約あやや御門の御母三位一終ふ  
う持杖とてから乃姫君とて一とふりあひ終ふ  
うの御志の御と終むつとあり一東二条院乃  
御をあらはやくとてあはれく人とおとす一記



うけりてはえしそわかむをさうびに位友の  
 此等うとの公守大納言の形もをねりしよりか  
 ばもくはめくむしきふうまをよきめくぬ御察する  
 魚しは君をぞ又の敵もいしう海りし記をぬふて  
 とまのしを辨まわしうおがふのまごど西園寺大納言  
 実兼乃形君のしうまいり給ひをきりあつたよ  
 もあつたうはしう一宵二日入内ありそれはま月  
 出せごしなまふさだの血代もあつたしうまはさこ  
 えしうかどしうのりよりまおをせごりしういし  
 しうかうもありけるこ程おが人もゆりき利  
 は形もれぬわのまは二条城の通成の内れにたふ流

女也なにもふくしそをしあつたえぬつごりえりこ  
 とのしういしうきすしうおがしういしうまのり人つ  
 らもさのふよふはまさうりゆめあまはいやあつり  
 あれすしうめぞきしう一乃乃人美流乃はまのりつりつ  
 おりしうかどしうゆへし流は子ひのまも又あり給ふ  
 とそふ二条院のしういしあ給ひして何ありおまはう  
 府の御車よりまてまつりくと上達部十人殿上人十餘  
 人御和の若殿夫人は松よりし御車のたふり  
 しうゆへし御車十あつたなま母は乃乃のしういしうと  
 深敷の二条殿よりあつた宰相中将の女大納言  
 子りしうゆへしおまはうし二車左久我大納言雅

忠の女とありてはさし給ふといふかゝり半のわけは  
流ふとこれ人をたゞらして流さ給ふまゝとありては  
まゝとぞをくさめこれ給ひを給右よ近清教深大  
納言雅家乃女と給右よ大納言君家町の宰相中納  
言重乃女と給右大納言左下二位重行乃女と給右  
左宰相君房門二位基輔乃女と給右左下二位重行乃  
二位の女ありてはさし給ふといふかゝり半のわけは  
おぼくを幸和のけりおぼくはさし給ふといふかゝり  
わらひもつとてはさし給ふといふかゝり半のわけは  
みかゝらぬとてはさし給ふといふかゝり半のわけは  
有り給ふとてはさし給ふといふかゝり半のわけは

兼明は消息もて給ふとてはさし給ふといふかゝり半のわけは  
うらむとてはさし給ふといふかゝり半のわけは

雲のうらむとてはさし給ふといふかゝり半のわけは  
さし給ふといふかゝり半のわけは

これおぼくはさし給ふといふかゝり半のわけは  
まれとてはさし給ふといふかゝり半のわけは  
ひさし給ふといふかゝり半のわけは  
りしてはさし給ふといふかゝり半のわけは  
おぼくはさし給ふといふかゝり半のわけは  
故の中將とてはさし給ふといふかゝり半のわけは  
おぼくはさし給ふといふかゝり半のわけは





すくすく此れより内なるん竹をそまげを海うへ  
 をゆむさかたはすくすくおぬらぬらひくすくすく  
 沖階橋一系教書ふまひらちけけりちりまそ  
 女房ともまゝくぬく重がひの唐衣さぬくあ  
 くすまひのまはくすくすくすくすくすく  
 ちりてん次くすくすくすくすくすくすく  
 ちくせんらひひくすくすくすくすくすく  
 う次かひのぬくぬくすくすくすくすくすくすく  
 どのぬくすくすくすくすくすくすくすくすく  
 ぬくすくすくすくすくすくすくすくすくすく  
 ち車ぬせんくすくすくすくすくすくすく  
 公徳

中納言おいの通重のたはつ稽かてあともあ  
 まくなりぬ存どぬの時よりおぬすくすくすく  
 そやぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬくぬく  
 れぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 のぬつうひますぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 かてぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 中納言ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 のぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 日店ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ  
 てぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

いづれで多くいふ所ありぬ事なれども此の  
もほいの水位をいふる事なきといふ所ありあ  
るそいひまじくあさくおとしふよまがやふ小后妃の  
位よりまじり給ふ事かきりいふ世のおむこと  
めをきくも由大文院本院東三条院これよりお  
しゆしていふ事なきまじり給ふ事かきりいふ今  
日は紅梅よりいひしりかきりいふ事かきりいふ  
二あ弁のめく衣う決いつ乃裳まじりて夫人おかきり  
乃よまじりまじりいふ乃乃女房八人ありまじり  
いふまじりいふいふいふいふいふいふいふいふ  
衣よまじりいふいふいふいふいふいふいふいふ

めやまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
大將よりいふまじりいふいふいふいふいふいふ  
は福を大業會大業かきりいふいふいふいふいふ  
まじりまじり申宮室后文院よりありあられくおむか  
しまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
母三位教院号あり御は准后の宣旨ありてれか  
夕よりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
よりいふ正應も三年よりありぬまじりまじり  
まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり  
本院よりいふよりまじりまじりまじりまじりまじり



うたつてむいしどらうらむぐまてくまいぬらうく  
きわりの血糸うらつてれく女官小舞系あり羨  
大六日よぞゆせ移ひたふゆくもあどり三月三日  
かゝるはのうらの宰相れ女の血脈よあまいたるを  
路つりして太子よまをまのう移移ふいぬか一に流  
血とせあり中よれ血糸よそあり一をまのうせさ  
まひけふおあぐらういまよくふてねをせまううら  
ぐんぬおどおありせんうらり井れ血つも沖子あ  
まゝたうしませむ膚くあどおあり一室あまひさ  
よたぬらいつくわいか一十月廿六日一院の血糸よそ  
まかきこしめたいつくぬたさ半とせむし一に色

をそ拙くおめど二年一月四日わのれよ紫霞殿  
息御子物大ありよりされふおたごうらおあして  
血糸ゆふ血をうたつて一とやうけまばゆなる  
半のありてふふくまきれもくおあり一さうぐら  
うれ親九日在流の陣よりたうら一あふあもの  
ゆに四人馬よのりかぐ一五年れ中一も場入てう  
よのかりと女孺がつかひのらあよあうて血こりふ  
りのをみあげされまけさうくおう流しげなる  
おとこ流あうらうら一たのよらむひたまよひおど  
しう還さてまごあう鬼おまのやうなりつらひさ  
おとこ血つまづくふ血よおごしうふ敷のねさ

ふくろいふまきとつづく地へ又ふ南殿よりらんが  
し水のまるとをさまはむさびへあゆみゆくる  
よ女孺内よりありて控大納言侍教新内約成か  
いひるるうへを中妻の内へふつゝを控ひたれを對の  
屋へ去のむてあげき成給て去日返り女孺のやうとて  
いとあやしにさゆとほくりていつせ給ふさひ  
叙置よりていつ女孺の玄象於兼よりてもげたる  
妻とては中妻の内へつゝ按察教つゝ記すのり歩て  
常盤井教つゝらよとておぐそのやどの内中よとい  
らんさかゝしおのねとをばあさつゝあかぶが  
よりいひたりかゝりて教のねとをさつゝひまのり

きれども大さく人かゝ中妻の内へつゝあひの  
妻かげまゝとつゝおとの名たりまのりつゝい  
たさひささるれとささるりやゆりなとてひめ  
まかゝねよ二条京控のつゝみやみこれ守とてあひ  
傳跡りて地奈とつゝつゝあてするゝあひつゝ  
ふきこえたれはふやまてゆふまのふ御教ともの  
かうしひさうれつゝつゝみざれ入よあひとつゝ  
むて教のねとて此忠とものうへよとてあさつゝ自害  
しぬ太廊ありけられたのこ南殿の北の中よとて志  
がひぬおとつゝあひ廊といひと十九よとてあひ  
大床ふれあひのあひよとてよあものつゝあしを

まうりく〜たれどもあま〜とあ〜めむ  
とまれどうねらして自害<sup>じがい</sup>を致<sup>いた</sup>すも〜と  
ま〜れらりつと〜とあ〜めむそのま〜  
あ〜つりつとま〜をま〜あ〜くたつ〜け〜と〜  
の〜とあ〜ふ〜  
うあ〜び〜く〜つ〜と〜う〜あ〜ふ〜あ〜日〜あ〜る大  
う〜ま〜れ〜く〜や〜れ〜ぬ〜ま〜ば〜い〜く〜あ〜く〜中〜文〜乃〜むの  
沖<sup>うき</sup>度<sup>た</sup>へ〜  
ま〜あ〜い〜ゆ〜げ〜乃〜由〜車〜よ〜て〜又〜常〜盤<sup>ばん</sup>井<sup>い</sup>殿<sup>でん</sup>〜  
中〜文〜も〜ま〜日〜夜〜  
あ〜とのあ〜も〜か〜〜このあ〜り〜あ〜ふ〜い〜よ〜あ〜ら〜り〜と

まうのひり〜すり〜終〜よ〜三〜条〜宰相<sup>さうじ</sup>中<sup>ちゆう</sup>将<sup>じやう</sup>実<sup>じつ</sup>乃<sup>の</sup>り〜  
〜れ〜ぬ〜三〜条〜の〜家〜よ〜つ〜り〜り〜と〜な〜ま〜の〜お〜ら〜や〜い〜  
〜か〜の〜あ〜り〜あ〜ふ〜と〜は〜の〜中〜お〜目<sup>め</sup>は〜も〜た〜れ〜ら〜り〜け〜ら〜ま  
〜ら〜は〜あ〜さ〜り〜あ〜ら〜ひ〜〜ら〜お〜く〜い〜  
ま〜く〜中〜流<sup>りゅう</sup>も〜あ〜り〜〜め〜ま〜あ〜を〜ま〜ご〜り〜ふ〜さ〜あ〜え〜あ  
〜く〜心〜う〜く〜い〜〜さ〜い〜や〜ら〜よ〜い〜ひ〜あ〜つ〜ふ〜あ〜あ〜あ〜  
中〜文〜の〜沖<sup>うき</sup>せう〜と〜  
禅<sup>ぜん</sup>林<sup>りん</sup>寺<sup>じ</sup>教<sup>きやう</sup>乃<sup>の</sup>由<sup>ゆ</sup>のあ〜も〜せ〜あ〜る〜あ〜ら〜〜  
ぞ〜あ〜ん〜と〜の〜ま〜ご〜ら〜あ〜つ〜ま〜よ〜り〜か〜く〜あ〜代<sup>だい</sup>と〜も〜す〜あ〜ら〜と〜  
ま〜つ〜り〜せ〜と〜ま〜ら〜り〜め〜ま〜す〜る〜も〜し〜と〜心〜よう〜〜  
ふ〜よ〜り〜と〜せ〜と〜か〜ら〜ふ〜け〜れ〜ら〜ん〜乃〜由<sup>ゆ</sup>本<sup>ほん</sup>ま〜あ〜り〜し〜あ〜ら〜



しき院よりうりてあゑき海へあはれまゝしよと  
まどき海へくちりくくまなり後ゆくをりそく  
中務乃美のいひあめはちやよりいとあざやうなる  
ぬおおほえありしうを世とすてきせ給ふきいそと  
そとりと記をりい名あもあり海へ一禅林寺の  
うへの流の人もかれきるうたをきさくしとせ給ふ  
まをまよるまきしてゆくまじくくがまきとあり  
さ海ありとおのつういふしひあゆり人が一深氏  
の丈の志よ中將げらるる人院よきくくつうり  
まつりあまてあも登ぐとそのまよりふあまはほど  
ちりき海へくおありくはまの山への井をいふよ

けて海へつふとまめくぬくくしあめいひく  
ゆくとねふまのいひこのはいつくまはありの程よ  
てまあようつくくうたきくあまきくしうい  
まてまのつりまあま人のなれたるいあひあひ七月  
なると風あくかよ吹縮妻々くわすずひあめ記  
く罪あまゆきくはひよりもねをうくきあまきく  
しき人もあまを上下いあまきくくくあまそ  
うおひく海へふ法堂いあまあまき記あくはよりお  
まきまをばちうたあよりあま人のけくひまきい  
くあまき記なる程のいあよりさ海へてあまをまのあ  
ういあよりなるあまのあよりうくまきくくげなる

とあるがその後のいふごとくいふ中ねをあら  
まのりておぼくもめくとの三人うちをぶのせとく  
此の舟はゆらゆらとせゆらぐーあぶるーちりあひ  
ひきおぼくもあふくあふくかえきあひく  
て人しくなくさなせよおんーまは母屋あはれ  
庵いひのうらんよやうかたと香深いひのかよるうれし  
かり衣さうりえいらりーぬらうちかたあめ  
しきさそあめくくとおのりーつらうあけけ  
まごほらくくとあひひきかんその中おもれ  
ばふーとらりねきくおぶきかたあふくん  
かりおぼくも中いひ来ーむまはておのりのりあ  
り

かきりふいとあまうほふらむおまねとあり愛  
々とおぶーと津らんてあけられをうー月おも  
ひおんはらゆらおもあふくあふくさー半と思  
ひうーひくおぼくあふくあふくぬらねたがすこ  
うくてむくとだよあめあゆらんぬらりなきう  
けさきこあるはまぬらうあつ中おありたり  
とうさそんうれはるやとおぼきうー出渡もはるま  
ぬらりだてあさうはりてあーらなきひさーあど  
ゆーと思ひまらむぐうそなききこるくさーう  
たくりあふく半うはねひあふくはらうあうあふ  
ぬあれうこのかきりなきもあふくぬらりぬらる







うへなりてらせ給ふまでたも〜と御女院侍  
を〜と給ひ〜ととておぼしめし給ふとてい  
うよあつと申の〜かかおぼしめし給ふとてい  
しう物の心〜とてい給ふとてい給ふとてい  
む〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
き給ふとてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
お〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
人の心〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
うよあつと申の〜かかおぼしめし給ふとてい  
〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい

をいさぐお〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
き給ひ〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
六月十五日えむの放生会〜とてい給ふとてい給ふとてい  
き給ふとてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
の諸國乃受領〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
お〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
人あ〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
乃由子なりあのは持中御意〜とてい給ふとてい給ふとてい  
を〜とてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい  
えむとてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい給ふとてい

ろくは舞樂田樂師子びんぐう一程角ぶは見あぐさま  
くもよ一つけふる事どもたも一わ一十六日ふ  
も程名うなるひかりたけなもいりりくはりか  
うくまくのまんまかどひき將軍はたけなの  
まよはらぐもれちとけあさうおたけなもね  
わさふち一たさあうりてあのみま一うあけりり  
ふらちうげよおうたけな又あぐさま  
そのちのくほぐなまかま一うちうち一ま  
出来くられ人きのたけな一りあぐさま  
そあま相軍たけなるがきれたけないゆめり  
所さあとの業ありり一たはうまのたこ

女いとあをそく思ひあげくた人も此位あぐさ  
あま一たよ一あうずさそのわくせたまふあ  
いああや一げなるあぐさ一とさうあぐさを  
てのせまともつかもきふいしまる一記この  
まよはらぐもれちとけあさうおたけなもね  
おりちうくもめでまうりてあのみま一うち  
一きいあうりあぐさ母もあまも近侍ちかひた教たけなさふ  
え一あぐさをりちうく一將軍もそわり一海  
一時の沖息おきあぐさ一たはるたけな禪林寺どめ  
あの中もそわかぐ一あぐさ一文永二年よりあ  
と一まて女四年あ軍もそ天下あぐさたぐさのわりあ

強きば日赤中の兵と云へりては、  
よき事なき事なり。かくてかくいふ事あり。此  
のありき。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
道す。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
志げ。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
ね。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
は。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
取。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
く。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
そ。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
き。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。

ふ七人出む。このあり中よ。つねに判友とい  
ふ者。此の將軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
ま。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
の。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
張。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
く。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
く。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
か。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
武。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
若。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。  
の。海軍のありき。海軍のありき。海軍のありき。

ふきのぶとさされをらるる難をよれたりぬりぬく  
まか井のほぞあさむしうさだのこしぬきたてもり  
つていとおそやふあふりしりぬすの判友と  
くこのかりきぬあせげり馬よ金うかみのり物と  
事取兵いりりくりくりしては輿のきいよりち  
きりもまぢよきしりし物幸よあうかづい大屋か  
あはらまのり沙がよよそくぬしり旨う殺いわり  
どんとのふゆ又馬出らんあふられぬりきり  
どもうぬくうちりあけいめいかりまの中れきりし  
洞夜外とさきうあもいし帝教のま教もくくやと  
七室とあつめくみぐだるるき満目とかくぬくゆ地

まのやあうもゆきいぬありき満ありし一因のふ  
とみやこれおとそくしりしとあうきりりき  
ぬりばらうもあまあまられより本おくたく  
よかしけあうもあまおく満きりてあうたふ  
ぶりしきみえをり時宗朝臣とひひしきま  
かしはあしして寛光寺は入道とていひなうとく  
とこあせとせよもいりた負時とふ本房相換の  
あまうよあうひひはけをたのかりぬひひし前大  
将殿をあがけほりよぬぐしはあしりあさすりふ  
あむしりくとおますかてしりりあむと又の  
しりきりしりのしり一洗きりぐしあうきりし月あ

此中こそあまきどたぬこひすく〜  
教らぞ秋おが〜  
まねひわり〜  
と〜  
此法名素實と申也  
つ〜  
中あ〜  
白井のうら〜  
こうら〜  
守〜  
うたなま〜

流ひより〜  
沖連教花山院内大僧師  
を井はひ〜  
このまが〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

むきこゝん珍ふ玄禪門院（んきんげん）のゆそをよおしつゝいび  
 なすひのゝあゝひもやをくくはしくまはし  
 のさ海よりを思ひのれふ守へもまはし一法の由  
 ろうしもちうさう程のまはうのたうさうあま  
 していそせつゝあゝ珍ふのまをばやあ  
 てのまにわう次おわそめのおのまはうよん  
 あまゝいあゝ海まのくわゝゝあまはう  
 あげくう中まのあゝせ珍ふは世代もい  
 約章（やくちやう）をも珍ふはるおがうゝあま  
 したなふ半もゆゝわうは月日おぐおがう  
 ゆまばかりくあゝは程のあけくれく永仁意

六年よりありぬ七月廿二日春宮（はるみやう）は位控つりておと  
 なすひぬお月よをわして五節（ごせつ）乃法了ぞとあ  
 いぞうおありよ実向ふくおをせゝあのみ  
 ねとにくゝつうり次とく新院

ととめふうちまやととておそののみ版  
 このふあまのしつうりわを終ぬ

印（いん）を欽（きん）新院（しんげん）あ新院

ゆゝいさゝくあうはこひ地志のいあ  
 川あのをとくゝとをんはよつをくも

堀川の具守（こもり）れおとくあの中うにたれ乃新院の  
 ころうやむも色珍（しん）つゝ一宵月廿七日也元服（げんぷく）して八



しとせ世中まゝにたより面白きものありて  
法を多くひひめりていづれゆく一ねけきと  
新院もせは父の院とは中院もきこゆ出づの世  
を一の院より法をせば一よおちりまぬあ  
つと一院の政さこしめせば天下に父をく  
方よまひひきあり程も月あまうつゆひら  
世中うれあり記か一と中門のあはれ月  
定實六月は太政大臣よなり終ふいづれあ  
納言入道顕定乃本まこのりいづれあ  
へかいとゆ一院の世あはれ人なりいづれ  
あ一こくたれせよ用りまはるふは子乃雅

房の中納言親定とていづれあはれ入  
おちりきおは院あは世中すまぬ  
まゝく御見候ありてあり一とあはれ  
ど二のい子城より終ふいづれあ  
所ふておちり一とあはれ一とあはれ  
院乃御腹よりおは親親門院とあはれ  
八月十あるまづ親王よなりなてま  
同女中り小妻よまはれひぬあはれ  
なり終ふいづれあはれ一とあはれ  
てふけいづれあはれ一とあはれ  
また三月廿四日沖郡佐志の約章の附録山院三佐



中將家定沖劔の役とははめ終ふまでけうき満よ  
由侍小わくをこれと終紙今出川のねとて出らん  
とらめて此仕をめうふつとよーりきれーかど  
きうりうき終人教中しくけうき満よとあり  
かんきくをこかくこしうとゆとて終つりこ  
そをさけあるうくけうりう後よ思へし家小あ満  
しきあとの志終一もや侍りらん十月大旨由襖  
あゝむらぬ代も堀川のおとけ終るつて終へ  
まいまのうも深氏乃由版よそのの終ふいとあ  
つとーりやむしこかーられうありとるさ後  
めはねとせねぞ心ゆとありめは又とーり乾元元

年六月十六日龜山殿へ約あり法堂いとあつ  
しくまつとくくくくくくくくくくくくくくく  
ら終終ひぬり終ら法堂より内よまをせ終ふ  
あゝり終る名終るまを月とるまは  
雲乃うくも終終るなりゆき  
沖終一内乃うる

君はうくあゝ終らつちのひなるとれ  
あゝんくこのあをまをこれ終  
一院の志終の宰お終女の中納言典侍殿くり終  
えねとく女みこをりあまをく終る中はま  
ぐれ終る内親王といと終る物りかづき

きあらんあはなまふひ代をも又おせの大納言うけは  
 まりて撰集あり新撰撰集と書きしめあ元元年  
 乙卯うせしりあててみあき春の法より東条院  
 ゆあやむ日くおりの法むくいすくはるゝせ給  
 つも依んぬいひごくあ給ひて法并うせあ給ひ  
 ぬ七十あまうせ給くたあくりりあはるあり法を  
 もそのはるげあはらあけくあきりめあはか  
 どあきりさけあまうちあつあきりりら法  
 目りりあきりゆあむふ七月十六日二条寫小  
 河原とくくれを給ひぬう十二とぞあせ給ひ  
 けあにあられらけさきひごきりあはり也

ぬまごしあまひのつよけりしきりつもばりそ  
 ぎそゆの法あむゆゆ法り燈どもあはりくと  
 こがりとくづきいづか法あひあきりあせりま  
 をうきりあきあひあきりあせ給あきあきり  
 よひるる程り六はうり貞願のり時二命あきり  
 むよまひまうり系換おりその門あきあまあきり  
 うけてあきあきあきりあきりあきりあきりあ  
 きあきりあきりあきりあきりあきりあきりあ  
 ついてあきりあきりあきりあきりあきりあきり  
 りんのせたとまの法あきりあきりあきりあきり  
 ちりりあきりあきりあきりあきりあきりあきり

あつらふがしつりてやむやりの物なすまひつりて門ま  
て出せりはほそまつりてわたりておのりてを  
たまりて出せぬが神とをてあててはるふ程  
てぞ沖車よまきまのりて休見ぬのわたりて  
せきわたりてはるわたりてはるわたりて  
なすりて深草院とてきこゆめまわりのわたりて  
なすりて義門院とておひりてなすりて  
くまりてはるわたりてはるわたりて  
— 海は花義の院

物をのこりてはるわたりてはるわたりて  
はるわたりてはるわたりてはるわたりて

春えそそそそそそそそそそ

あつらふがしつりてやむやりの物なすまひつりて門ま  
て出せりはほそまつりてわたりておのりてを  
たまりて出せぬが神とをてあててはるふ程  
てぞ沖車よまきまのりて休見ぬのわたりて  
せきわたりてはるわたりてはるわたりて  
なすりて深草院とてきこゆめまわりのわたりて  
なすりて義門院とておひりてなすりて  
くまりてはるわたりてはるわたりて  
— 海は花義の院



此ありき海をいそ復かこぬ河のまれば標よそのわり  
流ひぬまほされもくも愛れりしやうてわのくくも  
河けれくわふをのくもまをせ流ふ三条大綱を入道  
百里の海大綱言脚重あふたりまればわのくも  
くくて津茶火のくものかをそ墨深の種をくわよと  
くあくつくはぬくも流ふあひてより山はほくられ  
く本草きりもくひるをせられはまきど病けさぞ  
且きんあひるは海のぬれそふ流るくもゆよりかき  
は流りくはくめ長親胡は雅約有忠綱はあふと三  
きもむまひるありまきひなるくもたるくも女八日  
流りよりあそわくまきまの流りよりまの流り

く流るくまきまあひるは海をいそ復かこぬ河のまれば標よそのわり  
流ひぬまほされもくも愛れりしやうてわのくくも  
河けれくわふをのくもまをせ流ふ三条大綱を入道  
百里の海大綱言脚重あふたりまればわのくも  
くくて津茶火のくものかをそ墨深の種をくわよと  
くあくつくはぬくも流ふあひてより山はほくられ  
く本草きりもくひるをせられはまきど病けさぞ  
且きんあひるは海のぬれそふ流るくもゆよりかき  
は流りくはくめ長親胡は雅約有忠綱はあふと三  
きもむまひるありまきひなるくもたるくも女八日  
流りよりあそわくまきまの流りよりまの流り

七もぞあつせ給ひけふ此骨もこた院は法苑堂と  
きそき殿孫へと赤山院もどくめふ禅林寺殿  
とわねうし海く時より禅院よかされく南禅院と  
いふきも道かめり院の二たえこ忠純の宰相のむき  
免今を准后の忠腹よりねく海歩はひふ脚あき  
せぬふと法皇よりまきと忠かこりく海く院あきり  
とてまのり給ひといこりうらうあがり笑きぬり  
しうむ人よりこふふあきくあげくくしうき  
河原うらめり定ねき色く山は木葉を海あきさふ  
ふりしといくねく不うくもいこあられと  
うへより川浪のむぐたかき海滝のどくまうき

こりあつ免きふ出あき海の中どもかり此日教ふ  
種を脚の文日く川忠腹の内親王れかき事か  
どきあえうりして免ね紫より法けこむつま  
あき空へ孫あつ脚の法ふは大多勝院より一の  
庭よきさう坊孫ふ出まふり松は木よきひくねふ萬  
流ね紫よきさう法わぐきふかこりて九月世日の  
夕川く照割つ院の海くくあてまの坊孫ふ  
あはよりあきられも海くく深くなり  
神の海や若中ふをみらし  
木葉よりもそ孫く海あきさふまきさくまき記  
ふのたまふく海く

とていれおらむよきかめてなり  
宮よはぬきね秋のよみありと

あられよんあそまのつとねひつとあそむと  
くたがめらまこくかうらんよと  
夕たんのねうらひとめぞき  
園ち大畑まんわだと題のよの井とてけうのそ

あともねおみとくろあやのねをらん  
神よりほろふそむる紅葉と

女流のあせうとあそむとあめやうねお山とん若  
ふとあそふあゆむとねおふなりなり沖返半  
幾〜がう渡りいづのそあつとむ

くふ孤うねると秋のね紫と

あふけ〜とあそむ風あ〜とあそむとねおま  
肉と入ねと〜とあそむとあそむとひ  
流覽〜とあそむとあそむとあそむとあそむと  
人どとあそむとあそむとあそむとあそむと  
ひのねとあそむとあそむとあそむとあそむと  
まそれよと〜とあそむとあそむとあそむと  
紅葉とあそむとあそむとあそむとあそむと  
か〜とあそむとあそむとあそむとあそむと

清忠きよただ朝臣

山姫のあみとねあそむとあそむと

日影くやそむの暮のゆき

光忠の后

世中りなけこのあどきく福を

あそにうらぬほころゆき

らねをころあつめさるる内親うちせのゆき

あてまつり勢多せたのゆき

あまうかをまをまはる小娘りこむすひ

うらむえうれ秋の別後

雨うちたぬけけさひあられあり秋のゆき

て脚あしまきの山やまのゆきゆきをを娘むすめも清きよに

のびりきゆふ入るもれゆきゆきのゆき

かうあどきかせゆきあく海人うみびとかたれを

むかゆせゆきかたれゆきゆきををま

ま

あのはゆきあゆみゆきゆきををま

あくゆきゆきををまゆきゆきををま

ゆきゆきををまゆきゆきををま

ゆきゆきををまゆきゆきををま

ゆきゆきををまゆきゆきををま

ゆきゆきををまゆきゆきををま

ゆきゆきををまゆきゆきををま

ゆきゆきををまゆきゆきををま

ゆきゆきををまゆきゆきををま



まはきのこゝろいづくたけ義門院のあまのの  
らね中よすぐれうめさのよひひき  
さねひひうをほごうめんなをいひ  
大井河よむらむてふかれ多海院のあまを  
まのうをねまはうこまおる浦にねり川  
をくその女院をく人をりゆりうねり  
まんせむぐりふんやこま清のまあつ  
院のまもけいあまをまよりてゆりめり  
てまこくうあまれあね

丁亥の秋をう月十の夜うり

中村直道

第十回 う雁千鳥

院のうを位りねませしほごは中りく  
き女御更衣をまゆりてねりさ  
ねひてのちのねまいたいよまゆ  
けほごをいひみぐふありあま  
ねまどを紙かみ義門院のねん  
ねん人をねりか中務のまの  
まゆねまゆりてあまゆり  
まはあまのまのねん  
しよりまゆりておまゆり  
後うの院ありて永ながの院とり

出陣ありまゝに一條橋政友<sup>いちじょう</sup>非君<sup>ひくん</sup>高代<sup>たかしろ</sup>堀川<sup>ほりがわ</sup>の松を  
 の森よわくうもろひの<sup>ひの</sup>一あり上りうよ十六<sup>いそ</sup>おそ  
 まつり終ひくはけい<sup>けい</sup>めつこく<sup>こく</sup>いりこく<sup>こく</sup>は<sup>は</sup>大納言<sup>だいなごん</sup>う  
 とう<sup>とう</sup>ぬ中<sup>ちゆう</sup>よそ<sup>よそ</sup>おとせ<sup>おとせ</sup>く<sup>く</sup>は<sup>は</sup>お<sup>お</sup>大納言<sup>だいなごん</sup>あつ<sup>あつ</sup>ま  
 くらり<sup>くらり</sup>の<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>院<sup>いん</sup>よ<sup>よ</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>終<sup>はらひ</sup>ひ<sup>ひ</sup>い<sup>い</sup>や<sup>や</sup>ふ<sup>ふ</sup>ふ<sup>ふ</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>  
 よめでまをくして内<sup>うち</sup>納<sup>にやう</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>お<sup>お</sup>終<sup>はらひ</sup>む<sup>む</sup>  
 ね<sup>ね</sup>ん<sup>ん</sup>そ<sup>そ</sup>お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>海<sup>うみ</sup>に<sup>に</sup>加<sup>か</sup>踏<sup>たふ</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>つ<sup>つ</sup>に<sup>に</sup>ね<sup>ね</sup>ん<sup>ん</sup>より  
 地<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>み<sup>み</sup>よ<sup>よ</sup>ま<sup>ま</sup>お<sup>お</sup>め<sup>め</sup>り<sup>り</sup>さ<sup>さ</sup>お<sup>お</sup>た<sup>た</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>は  
 あり<sup>あり</sup>く<sup>く</sup>む<sup>む</sup>い<sup>い</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>せ<sup>せ</sup>よ<sup>よ</sup>や<sup>や</sup>う<sup>う</sup>く<sup>く</sup>む<sup>む</sup>  
 出陣<sup>しゅじん</sup>一<sup>いっ</sup>内<sup>うち</sup>納<sup>にやう</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>む<sup>む</sup>の<sup>の</sup>君<sup>きん</sup>院<sup>いん</sup>ふ<sup>ふ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>い<sup>い</sup>り<sup>り</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>め<sup>め</sup>ら<sup>ら</sup>  
 契<sup>あきら</sup>り<sup>り</sup>お<sup>お</sup>い<sup>い</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>清<sup>せい</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>こ<sup>こ</sup>も

赤<sup>あか</sup>の<sup>の</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>よ<sup>よ</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>らん  
 赤<sup>あか</sup>の<sup>の</sup>む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>こ<sup>こ</sup>よ<sup>よ</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>は<sup>は</sup>あ<sup>あ</sup>らん  
 徳<sup>とく</sup>治<sup>ち</sup>二<sup>に</sup>年<sup>ねん</sup>よ<sup>よ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ  
 世<sup>よ</sup>義<sup>ぎ</sup>門<sup>もん</sup>院<sup>いん</sup>そ<sup>そ</sup>こ<sup>こ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>さ<sup>さ</sup>か<sup>か</sup>や<sup>や</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>え<sup>え</sup>  
 う<sup>う</sup>ば<sup>ば</sup>院<sup>いん</sup>乃<sup>の</sup>お<sup>お</sup>め<sup>め</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ゆ  
 水<sup>みづ</sup>行<sup>ぎやう</sup>念<sup>ねん</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>ご<sup>ご</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>お<sup>お</sup>て  
 い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>海<sup>うみ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>ご<sup>ご</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>ご<sup>ご</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>  
 お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>して<sup>して</sup>日<sup>ひ</sup>と<sup>と</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>  
 の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>ご<sup>ご</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>ご<sup>ご</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>  
 お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>お<sup>お</sup>ろ<sup>ろ</sup>く<sup>く</sup>  
 く<sup>く</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>  
 一<sup>いっ</sup>三<sup>さん</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>にち</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>海<sup>うみ</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と

うまのふに和寺の禪助僧正と法師範とこれ  
寛平のむらとやあらずしむ密宗とを学せ度  
はひを致す月よる海山教と法如法源とをせ給ふ  
とどくわつしてのちを大方女房の法とすまのうは  
男よらりて由巻おどえまのうせよあつはよはう  
まの致いつを由持跡よくわたりまはいとあは  
つとさせんちとくふとぞあ女流のわらうと致し  
うは今林教とを法華とを日とをこころとびせ  
とせ給ふこの今林と山乃雅原のたをせとあは  
たりは義門院れとくしとを梵字ぬと致給ふ日  
うはれまのうふ法苑經一字三礼よふと致給ひ

て橋取院とを修表せとけ是寺僧正淨導師女  
院の由骨も今林よ法苑を多とくまてせ給ふ  
まのう致給ふまは月とふ女四日よはあつと  
ありおわく入をる復いとわらうとふては月  
とくあつとくより肉はう包まいあつとびおとす  
とそと油くは由源法と檀葉と愛深とこれ  
秘法とを諸社の奉幣神馬かふと給ふとあは  
はまどむげふあうとあつと致給ひと女二日  
あはふとせのひとくいとんかか馬車け  
りあつとむもあつとく人くいとみこれと  
はとあひかく女二日祿の財とくりふとを致給ひ

大のきえぬりき浦とてかゝりぬるるをせらるる  
ぎいもびもをへけりきかん浦と申すは徳  
大寺持正孝の太師とて此女ぞうへつゝあはれ  
いぬふりぬりけりてかゝりばるる由ありえ  
めできくしてきあひひけりありあはれとてい  
かゝかゝ大目よ浦とてけり先帝とていふは  
あつと流号ありて後二条院とていふは  
大将貞守とていふはけりこの浦はけり  
しきし大将よとていふはけり西門院と  
けりしきしを浦とていふはけり  
事也いふるるときたまふるる

ありしに世人もいふきくしきくし  
もきくありけり中も流号ありて長樂門院と  
きくしにけりありけり事とていふはけり  
し春宮とて正親所<sup>あつと</sup>のけりけり  
六月廿六日踐祚あり十二日<sup>あつと</sup>に  
此地しつゝもほごをくしけり  
おきばけりしとていふはけり  
もをのがちりしとていふはけり  
きあり持明院<sup>あつと</sup>とていふはけり  
しきしとていふはけり  
そへくといふはけり

の清くをあらわすのていまいはけりしるはうわ  
かゝると九月十九日立太子の節會ありて城よ  
井原をぬまほとせとらぢむふらうしつる人  
くすこゝあぐりぬへしそはし十月大か  
すのねを保元乃例とやと十月朔日た宣下  
ぢられしりあゝしに代よありて月日さ  
あゝたまるしふたり十月十二日清和位極政後昭念  
院教を平々ふはれりありて歴々を約章にま  
いり約ありてさかざりけりどもゆらたよくら  
でめどくまゝに記ゆく延喜二年十月廿二日  
たかど廿四日大嘗會應長元年正月二日

十五りて清和がゆりあゝし清和院に  
ひきつて関白教のしるは平清和のりは南  
殿の儀式をそとせよそむありなめてけりし  
清和院に清和院とありてむけしは極政院と  
おろ大將公頭琵琶玄上公清和院大納言冬時節  
和琴大炊法門中納言冬氏節西園寺中納言兼季別  
當季勳符の節ゆきけりしは平兼季公守朝臣拍子  
有時めどくまゝにけりしはありてありてありて  
後宮ありてありてありてありてありてありて  
とありてありてありてありてありてありてありて  
まのていまいはけりしるはうわ

もははあうそぞありあふ廣義門院もたかゞく  
因母の由んちよそよあづめをたかり義院のうへを  
くり和弁のなよ由名きうくいみくたうくまを  
むゆりばかりかとおがされかどせ正應撰者  
もの事ゆへうづひごもあうて撰集もなりし  
うむいごをたれうおがされく

我せうはあゆめ和弁乃満ふる

むかきさ名をやうまよのこらん

なふよよあねたうへゆまのこといまごい  
そ記きう勢強ひく為兼乃大納言うあふまわり  
てあふふよりあふこれあごもあつめくねく正和院

正月廿八日癸せう撰玉葉集とごういふねりけり兼  
乃大納言ハ為氏の大納言をよくにわ教右き兼  
あふゆい子なりかごうあふ院の由おゆえ乃人  
よとくかき撰者よをゆごまりよたりそひひと  
くおふるとかどさうくむやいふの後乃うこの  
みよま坊抄ふゆあけすごうい前教大納言を世あ  
ん地よはうりあふあんあうやまねゆもいゆめ  
きくじう乃約成大納言のゆゆりゆへふあふと  
時の人ゆたり屋こくもはゆようもかせおひ  
まゆふこくや正和も二と坊よあふぬと子ゆ  
奉若とげあんとおがきねあう月は着つる賀

歳は悲むくはふりけは福あり〜記す海のものも  
作りけりちちくはゆりふ女房ごり〜宇地を不  
ふれはくつごりごり〜このまら字〜記す物あ  
い色むりり〜津製

わら月や本はををい〜ほれあ記よ  
〜これぬ神のまや〜らん

まゝい

わらあ〜うあ〜はちり〜をねの〜き

お〜むりはらつ〜もかをら〜

人〜きけ〜時む〜らり神の〜く〜ふ〜と〜記り  
乃秋の名妙より毛悲ひ〜〜大納言権者のまらなり

一そあ〜よ〜れゆ〜秋とあ〜

あ〜ぬ名妙はあひう〜ん〜

又院

ひふあ〜ひ〜つ〜あ〜まん〜

秋〜を〜海〜さ〜な〜秋の〜を〜

十月十日有休ん殿〜此年か〜ら〜ら〜ま〜び〜と〜お〜り〜せ  
を〜え〜を〜ゆ〜次〜は〜く〜海〜を〜秋〜日〜〜れ〜此〜車〜あり  
上達部殿と人〜す〜あ〜ら〜次〜は〜ら〜ま〜つ〜り〜記〜ふ〜世〜か  
ま〜つ〜り〜ご〜も〜ど〜も〜新〜池〜よ〜花〜つ〜り〜ま〜を〜ま〜つ〜ら〜あ  
記〜ひ〜〜ら〜は〜ん〜つ〜ふ〜の〜お〜が〜き〜れ〜と〜休〜ん〜この  
か〜ら〜よ〜の〜も〜そ〜ね〜ら〜ゆ〜〜記〜よ〜ら〜こ〜ら〜ら〜と〜は〜あ〜や

三月日經と文保元年九月三日からねをせ給ひよき  
 伏見院と中記は母玄輝門院永福門院をどのの  
 白げさ杉りむ屋ふしつ法門を沖經殿の成を  
 きば天下を交うるに法院姫君あまきおり  
 まし加て院号はあまうき門院延昭門院をりふ  
 とねらう海之三条留小治乃むりの院れおとにあ  
 づりよりほりうきまをまづふ内裏のしりつ  
 さいましあるしなごのさしおりうりき  
 ろつき事なれしゆらんせし中し  
 てやごぬつ

第十五 秋乃み山

文保二年二月廿六日津門おの井を汐小雲文の  
 すと小三ろりよみり堀のしほりつ  
 およめでそくお母さ終つ法皇やこよあ  
 堀のしほり世中志ろりめは龜山殿をの終事よ  
 あちろりろり大覺寺の月よりし御堂をそくあ  
 りのとおろり海つしほり密教のゆり記んを  
 えとのしほりおまかなをししむとのつろりも  
 系よいぞをせ給ひよかきまのゆりかよふ人も  
 まきちろり振りしろうしむらしはあを引く  
 事なげとせよといふ井をけししとむら



しづむおほき九月廿九日也即位なり約章の  
南日より左大将内親元山院右大将定約列と  
あつそひく説書ももるくのとくれど此書と  
とくくも職事さうりしとくく部とさあり左大  
相の仰又君は内実此様とせせえくお元りこ  
ろおいらくくればひりかばせうろくせくあ  
へ給ひるあさしよありいまいそく人をそくま  
まぐられどもとてうくあつそふとぞせえく十月  
廿七日大嘗會法署堂は所祿の拍子比きめよ  
後小姫の宰ね有耐とくふ入大内まつるを車  
よりねるく様よいくすくようおらわ申さあひ  
めくものをりをぬきそはけくはよあまにあやな  
くよりてがりおむりきあつそふたふ人の中よ  
ていあつそくあつそふと拍子おふあつそ  
人うもつ油とけ大嘗こもををせらるるひさ  
とめお福よかい河持三位顯喬といふものけ拍  
子といひぬく祝うつとてたれく思ひけさくし  
つあつそひとせせせせり道りくすけらるるあ  
くられぬもいむくはあつそくはくつはに位いな  
たれぬふくつとてはくしぬゆとやあつそひの  
春宮よは後二条流のつら子あつそまりおひぬき  
を申つ坊とてたれく油とけ時のまきにたれぬあ

あつそひく説書ももるくのとくれど此書と  
とくくも職事さうりしとくく部とさあり左大  
相の仰又君は内実此様とせせえくお元りこ  
ろおいらくくればひりかばせうろくせくあ  
へ給ひるあさしよありいまいそく人をそくま  
まぐられどもとてうくあつそふとぞせえく十月  
廿七日大嘗會法署堂は所祿の拍子比きめよ  
後小姫の宰ね有耐とくふ入大内まつるを車  
よりねるく様よいくすくようおらわ申さあひ  
めくものをりをぬきそはけくはよあまにあやな  
くよりてがりおむりきあつそふたふ人の中よ  
ていあつそくあつそふと拍子おふあつそ  
人うもつ油とけ大嘗こもををせらるるひさ  
とめお福よかい河持三位顯喬といふものけ拍  
子といひぬく祝うつとてたれく思ひけさくし  
つあつそひとせせせせり道りくすけらるるあ  
くられぬもいむくはあつそくはくつはに位いな  
たれぬふくつとてはくしぬゆとやあつそひの  
春宮よは後二条流のつら子あつそまりおひぬき  
を申つ坊とてたれく油とけ時のまきにたれぬあ

少弐敏震殿しうじのあきざんよりつりて事畢後しうじのあきざんのふよ二月のふ  
軒のきの梅ありふれり〜記なきと以て〜て内よ  
た〜まの〜場をまふはたはしめりて

なれはすはたのやうの〜む

たの〜新偶のまよあ〜と云

古き〜南殿のあ〜と云

たはたふ思ひ〜と云と云

あ〜ぬ色〜と云

おらと井たゆつをぬこのるんの本院ふの持の院  
あ〜すまをぬふ〜と云ゆす〜と云てた〜  
〜と云はま〜と云の院のうらま〜と云

をぬと〜と云は〜と云ぬふ〜と云あり  
ゆあり〜と云あり〜と云中〜と云む〜  
〜と云も西殿〜と云あり〜と云ふ〜と云む〜  
〜と云ゆ〜と云あり〜と云あり〜と云ひ〜と云  
あるとふの院あり〜と云ふ〜と云あり〜と云か  
〜と云ぬ〜と云あり〜と云あり〜と云本院の廣  
義門院の御殿の〜と云あり〜と云あり〜と云お  
が〜と云〜と云ひ〜と云ぬれ〜と云けり〜と云る  
世よ〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云〜と云  
は〜と云〜と云

あ〜と云は〜と云あり〜と云

とらふ山を花もひらけ

大雲を敷くまひらう馬車乃をまらみふと  
出らんして法宮よもせ給ひたれ

都すめはきひくもる山里

あさきつこをこすうすして

今れう魚いさやうよりおんがしん物園ち乃入道たけを実兼

乃末乃由女並季北大納言乃むらつおん版もその  
珍ふと志のむくぬをえ給ひくもつたれさお思ひ

とよまそくくおんおとあうたうつまびい津

しうおん乃宣旨せしめかどきこ推ほどもおくおんがて

八月おん版たけよりあまを入道たけのともよのひりも

よやくかひくめをぬくねをゆふゆを

く秋はり幸あつと八月十五日乃秋名とえさ秋名

とふ光やまをく秋名くおんおんく免

てさたてえもれやあまおあひ乃永福ちやくつ流ら

くおんの版れゆたけ法消息せきあまを

あまひくも雲井忠月もゆりそふ

秋のみふとねのひらうゆれ

出たていまひきこらんとのゆをせく内れく

びりえく株乃やうの月うけ紙

おのひくもや男むやあつむ

津門乃おかおん血脈ちやくのあ秋名も望版たけあまを

珍ふ母唯唐も流芳ありて 漢天門流もぞきこは  
めかろ流河もかやふめぐり事なせし一むら  
きこは内もは万里の流大納言入道師重といひり女  
大納言の曲侍とそいみじうに記さく人かは河川  
ままの権大夫もあはる君いそぎのむとんをわれ  
けるもやうかかたらうせぬも人のあたるひさ  
あはふ二三日しうあまほむかきか入かあはるまぬ  
まばう魚もさゆくふくくあむすやむとれあ  
きしうもあはねゆおぼえり射あまはるむく  
かろあき勢あひくげふか海のうくしあはるむく  
しきもあはるれはまむとちかうとくしう  
これいあそいんしうかうせあはるむく  
あそいんしうか山唐もあそるのあはるのちりり  
あはるのあはるなうあはる

うはるもあはるなうあはるしうあはるもあはる  
あはるのあはるしうあはるもあはる

あけのあはるしうあはるもあはるしうあはるもあはる  
うはるもあはるしうあはるもあはるしうあはるもあはる  
うはるもあはるしうあはるもあはるしうあはるもあはる  
うはるもあはるしうあはるもあはるしうあはるもあはる

うはるもあはるしうあはるもあはるしうあはるもあはる  
うはるもあはるしうあはるもあはるしうあはるもあはる

もて正のつとむられきふと殿と満ち〜公みん峯みね法  
大納言いもいさう〜おとせ〜あふとたふ〜  
事細きせされもおのひり〜すまれ〜やぶ  
つ〜こふさうめ〜さ津川君は母女後十月を給  
ひ〜かを内給〜おめくまを〜つふ下ひ〜  
どうめり〜〜あ〜すられ〜いふ〜  
おとせわけ〜〜るもあをれ〜〜く〜  
か又給えやま〜りぬ〜さ〜〜く〜  
〜〜むり〜又志願〜海の家〜あを  
たま〜〜い〜か〜おを〜〜あ教大納言をせう  
給りえ給玉紫は給〜か〜〜あ〜い〜い〜

きぬ〜む〜〜この大納言の女むすめ給大納言の君と坊やう長  
出射きりか〜おがされ〜津つ服〜一乃御子  
女とのを法親王な〜あま〜物〜給ふは大納言  
の君をともやう〜くれ〜か〜い〜と位を〜  
給ふ贈たま給に位を子と〜集〜も〜給ふおわく  
ゆり〜あ〜大納言入〜と并す〜玉津嶋たまづ  
乃社やしろ〜あ〜〜給り大君を地あよりけ〜  
りてあ〜む〜思〜か〜だ〜あの大納言は風と津と  
〜給ま〜も〜〜子〜給〜も〜あ〜い〜  
〜〜〜た〜〜〜は〜い〜道通志  
川〜給〜〜九月と玉津嶋〜〜〜



沖舟の舟より一とらりては、いぬ船とありて、舟戸をい  
ごさ勢はひく、いさやうん舟より右道乃陣うごんのお辰と見  
えぬ、舟とせやとありに、月乃うのま、舟に寄りて、  
あむゆとぞん乃は、と夜よあやうと、そとて、見ん  
南よりおと、ま、上達教をす、此の高欄たかねよせあり  
を、あてつ、教人、を、夜よありて、ひあ、か、を、伴と  
らん、なり、池の、水みづ舟り、よ、せ、と、左、右、乃、講、陣こうじんを、う、す  
け、お、その、せ、と、舟、舟、ん、これ、ぞ、ま、つ、り、さ、ゆ、も、う、か、り、  
さ、こ、と、より、い、え、ん、よ、あ、ま、め、つ、一、今、く、お、舟、つ、こ、を  
し、記、た、と、そ、と、こ、も、た、と、ま、つ、り、あ、つ、と、り、あ、と、さ、  
か、一、て、お、月、あ、つ、と、り、を、記、池、の、か、と、見、よ、い、つ、こ、

か、あ、か、さ、秋、乃、も、あり、い、さ、ふ、い、と、一、これ、教、を、お、り、  
さ、月、と、か、つ、と、り、ぬ、あ、げ、と、い、ち、う、う、あ、つ、と、り、う、魚、の  
沖、製、

か、の、乃、と、そ、と、め、と、め、く、月、よ、つ、あ、つ、と、り、  
お、一、と、男、ふ、ね、い、あ、つ、ひ、さ、り、き、あ、つ、  
を、講、一、あ、げ、さ、お、お、景、湯、乃、境、と、ひ、は、と、さ、つ、と、  
る、お、つ、つ、み、一、う、お、ん、い、つ、と、も、お、一、う、あ、つ、ぬ、お、  
ど、も、お、お、く、さ、こ、と、り、か、ど、お、割、製、乃、境、の、と、ふ、さ、つ、さ、  
れ、お、ま、を、つ、と、り、一、よ、お、く、と、お、つ、と、も、又、と、さ、お、あ、く、  
る、表、元、亨、二、正月、二、日、初、親、の、行、幸、也、法、皇、い、れ、を、と、り、  
と、た、式、部、卿、乃、見、こ、れ、沖、舟、人、欲、沖、門、系、扱、掃、梁、

とひふぞねうしよ内表々二系万里山河のまじ  
陣の中より大臣以下ありよりほろろまのくは内  
を政大臣道經左大臣実恭右大臣兼左大臣藤原中  
左大臣中納言藤原具親公敏右藤原實経  
宰相實任冬定公明光惠公泰資綱公久  
左中將お定源經左大臣左方とけりめこのりすく  
さうは後池山の本よりさうさうさうあはれ  
けりぬねのまをさうさうはらうさうはらうさ  
まのありふおさうはらうさうさうさうさうさ  
くゆりてのり言頼本もか一測晴よさうさうさ  
のり一はとあ代とあめさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

仙乃夫もかやとさうさうさうさうさうさう  
御樂と御中門のトよりいつおあうあふあは  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
叙重は権亮宰相中納言公泰法とあさうさうさ  
公卿のたの事おは御簾とりてせ入るさうさ  
はらうさうさうさうさうさうさうさうさう  
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさ  
のさけさうさうさうさうさうさうさうさ  
高探の魚はさうさうさうさうさうさうさ  
さうさうさうさうさうさうさうさうさ  
あはれあはれ中門の廊上上達部おはらうさう



口してはやうとてまうの申し内は此の事り吉田  
 の前大納言定房浦といひてあつたれりそありれよ  
 らゆかろちこつちをかく思ひつらぬよとて  
 けふの涙ありむじうはねどりやぬきをみよとの  
 道をとるまひひこく郡彦といひぬ法皇も内  
 に入らまむとあげあつて左木の樂屋の調子と  
 ありやとそりち又此のつらぬ法皇をみよ  
 けうちのぬきとけりりよとてなまはるるを思ふ  
 むじう小内よりさうのきり女房ともありけふ一車  
 小大納言敬うけりともありのこまひ一介のり  
 たり御典侍資茂かぬきこひとてやうや二方たり

新長房中文内侍後く雅辰とまきこえよ記ありの夏  
 川いねと之乃車にかつ内侍尾張内侍ありよま  
 いまいつかぬきこは上達部はあよ着て後出巻  
 まいふ屋くそりふ泰宰相中将治膳右大将兼宗  
 の経邦人跪地下の舞いめあきとぬきあれどり  
 うらよやふはこふおりのあもむとめをこく  
 足抱流の四曲ゆえとてあ玉といふ人相教のふ小が  
 しくりやうなるり落路かく節と笑かどぬき  
 ちけきよとふふ記くこそふのあやめを思ふ  
 目記そのあらまじりあつたそひとてあ調を更冬  
 貫法範乃ゆき小出節入とてちてまのふ関白より

て此のよまのつらき娘は右大将の笛中あまの琵琶  
大文大納言等在幸お中將相琴光忠宰相兼  
音も吹くもや拍子な長長情冬忠乃宰相もを  
北く海くようの吹笛乃者すみのかりていみく  
ゆえさうらなはれむら奇名尊と任勢の海のかさり  
めそきくきこたふくせしとておきと御とく  
地まの糸錦の袋よ入をなゆめえおの蓋よとを情  
原なるな長さうつぎて関白よとてまの秋あふ  
ゆらんせきあて冬方とありて強んそ次は唐の赤地  
の錦乃袋よ御琵琶入とまのふそのかりゆむら  
船と入らりととりてゆまよ門がさうらのくしと

あくゆやくのそゆくせはむゆら法を局くもすれ  
く大文寺教りのここのつらき娘はゆめ入く  
世中は幸ととも奏よまのつらき娘はゆめ入く  
よゆとこある井よのこ入ゆめゆめゆめゆめ  
おゆせはそのな法定房乃大納言あつまはゆめ  
秋門よあはれあはれゆめゆめゆめゆめゆめ  
息をるゆめおゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
てはゆせよさうあめおゆめゆめゆめゆめゆめ  
ゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
きれゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
よりあるはゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ

ゆゑにちりくちゆゑに上達部をよめるか  
きり思ひひしものさあなりおやんかとははなす  
りし言ふ思ひしものさあなりおやんかとははなす  
けりし言ふ思ひしものさあなりおやんかとははなす  
けりし言ふ思ひしものさあなりおやんかとははなす  
けりし言ふ思ひしものさあなりおやんかとははなす  
けりし言ふ思ひしものさあなりおやんかとははなす  
けりし言ふ思ひしものさあなりおやんかとははなす  
けりし言ふ思ひしものさあなりおやんかとははなす  
けりし言ふ思ひしものさあなりおやんかとははなす

これ月乃らる久しかりきり賃人の法ともや  
しよや女ままのぶし事かぬむえし  
上達部教人十餘人まむり関白教房実計  
お衣りしお几帳のうしぬしあらしむせしふり  
おむしな紙しお琵琶をよむしお大將実勸  
琵琶春宮をま筆授大納言祖房筆授中納言成忠和琴  
左宰相中将兼泰筆授侍御家笛右宰相中将光忠  
筆授拍子ハまの左折おま実泰をぬい冬定か  
りしよやうのし琵琶のぬいむしあらしむせし  
左相をむしあらしむしあらしむせしあらしむせし  
りし沖遊をむしあらしむしあらしむせしあらしむせし

人々は文ととりあつて一度は文章のうらり  
おく板講のをうらねるみ下ら夜もやのしり  
あけをその中製とたのしむかあも編  
うたうし朝録のなまふ忍いとうの  
けりゆ一都のいひをのこすこと記さる  
いみ下くらんりのかやうはゆし  
て人もつづむすきはあやゆらあつた  
のうんそく俄よかてと題となまふ  
詩をばくら板歩とよませくか  
少ゆらん下りよいかに井とあや  
むるはせぬその七月七日乞巧奠  
のうんそく俄よかてと題となまふ

もこのとめてかひそより人くよ弁も免され  
のの録よりあつたを免れを例  
言葉む免多ふ人くり作文より  
りう歩節筆策をよはぬ人ともあり板の  
ゆらむてはつ歌中文字の  
のりせぬふははらふも琴瑟あま  
き晴磨乃ちあつたよの女  
三位殿といふも筆ひうれり  
の内はもわらへるも琴瑟  
大納言は三位の師友大納言  
きはめどわらへる蘇香  
新秋樂乃こたへる



そめぞきくもみ終る沖形なかりをよひなうふく  
うたふ海——まきふ一人はわたりてせせめ  
やあぬをくえて終ふはつ乃中納言あき頭貫あき元  
はくもかきひつた山院中納言あき定をいさう  
よらうはらうき上達部よそひふせめつ——か  
に世人もおりの——かどあはやうしやふか  
とそまぐつものまきなるも泰宰相たいざい中將ちゆうしやう叙爾玉  
忠役ちゆうやく津よの海をいさうのえきううのけうはかど  
くうはあかひひひ出るさううたをうまのあはぬ紅  
忠らういひひとあきひうれりあつ——あ  
しあうる人うよひとあつ——ておひかひのあき

あか記よげくたのり——まきもあつ——  
房ふさうまはらう北下きたげのひすう北下きたげと物ものの  
あをとうやあは減へん車ぐるま季房せふぶを山やま下したのひす  
あわのまぬ侍さむらい弁べんのまけひはうちあつ——  
あをまら別べつ者ぶつたき侍さむらい資明すけあきは——北下きたげふく  
いあ物もの八人はちにんまらうまらあつ——のまきあつ——  
まよ病びやうの丸まる丸まるまらあつ——あつ——  
あ人あにんもまら北下きたげのまきあつ——  
まら一いち人にん中流ちゆうりゆうのあはつ通とほ願がん乃通とほ願がん乃通とほ願がん  
まら——あつ——あつ——あつ——  
まら——あつ——あつ——あつ——

て春の久後くひは海力もぞをせられしる春よ  
久我のわね通宣りしすくたるわどよそひを  
かりも福ひ跡ふかちりしちいさなよちりな  
らむれき取ひたるくあこがえりしそれより  
はぎくはむつしきふまきぬちの酒力も  
こそじりしちりし者よはもひかちりしびいし  
く酒くは酒とわらしはあねやとめなうた  
りし海らりし辰らね教路も赤地ののりしはあも  
もんも目のきぬさ海ふありのりしとあちけなま  
までけあうたなまそまあき山吹と白ひりし  
うち物りしてむしはけしと花のまられか

どまそあまう小字のくし病をすいりやう若玉  
あくとをきたる朝日よかく屋をそまぶといひ  
うぞえけり初園もれ路力もたかどのりしはあね  
松とむまびと霧のまらと白と黄ふくうちあ  
はあたる山吹よりいふひあくとえけまあし  
神寶神馬沖てくうなをぬかもすがりけし  
あうして又の日のくまのうらうらあねおか  
卯月十七日賀茂の社よけあかりよまアねくは  
さねよおかしちぐのたがさひもけちああ  
すくあかり別當の下敷あのみんか二人うらん  
う雛の尾をえつうちかへくはけしるをえ

室のちえんよまのまゝ一げりありあはれ日かきあまは  
おんきちりろくろくちつぐまを形やうり取り海  
くまの使ハ使大ち中ね法をりしままを又云  
の解よそねをれをまや大はの大状出の留小  
海津家よりそいそきれを人かるところの  
めをきくもねとえさう下製津家の紋のりうを  
あつくよねりきりうもや近法のはひははあ  
いそみぞききりめねつり中まの使を亮殿  
ありはごうけふあひるものあまといとよけよ  
をもくぬきゆありそのあせり小但大はの節合をこ  
をふかた大ね理か大はよあて製ね大は冬

敬なよろつりねへご右大將実徳内大はよあま  
又乃日屋ご右大は友大郷おこすひねへを昔者に  
内大は冬製ね近法敬近ごあまかやごうりて  
のまゆ一製まごのあねよめつりくいでお  
さあねつり法はい戸をたえち友よのまおり  
まを大状出武部ごうんこあ家と内大は敬  
りうけごねるご目大郷食うなまふ尊者よは右の  
おまごやうて我あ家の大郷食うのねまごひきり  
まをりごり製つごあかごもまれ人も大將ごね  
をて製力ごもえあご次室いめかしてかごもよ  
室一はごりうりたごいと取りごりごり



松と磐地藤門後兼高筆兼隆資朝臣等  
室那之位中侍云春琴教宗朝臣等有頼宰相  
拍子とりてあそびひくく〜  
法子のさやうよむとをく〜  
いやくかく右大臣友の仲父君Shan関白教家平内  
をやく取りくありひひ〜  
きは友のうられ人〜  
まうてそすこ〜  
してこの右大臣殿おど〜  
よりを男との〜  
兜の肩う〜

くかやふ〜  
後兼忠朝〜  
七年が後〜  
と成定〜  
隠岐守頼基〜  
い〜  
を〜  
法〜  
ら〜  
法〜  
り〜

もろともせういごに控くたあうまうまうかりか  
じとのたまひもそそねふおいに記こまりぬ右大臣  
も清あよきあうり級跡おかくいし記此氣より  
くもそそ流むねるとりうしとおがきれりそそそ  
のちうり清教入たるも厨のまそあそ控もあう  
そまどひるぐりはゆき人よかこまも教習し記  
よそ衣むさうけおどしつてをそそまうりゆりく  
とむりりむりつて福かこうそねあそり清白の  
うれ跡ひしう一後後んまそおげきりゆりのふ  
りぞするお教の所をうりおねされらるるかこ  
こまそあをありとさういんごりありあうり

第十六 春の別

卯月れを急はくしより法皇御あやなれあう  
せ跡へも天下のうらた思も厨あうり御門をいみ  
しとおろしそそげく此流法もそそあうりゆり  
はごめくそそき級跡へよふおむりかこいり  
くしとさうりひもそそりしそそあうりゆりよ  
とほむ衣よかこいんごりんして教中曉くあうり  
けらけが跡をさうり此馬もそそ馳ありそそなま  
めりいゆりむげよまのそそあうりゆりゆり  
賞寺給へゆりあうりゆりゆりゆりゆりゆり  
事とそそいんごりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

親王世圖しんじゆと申ゆるといふ事一たゆみあひまひえ  
 と申すはひとくはたえんちよきうらりみさうとんま  
 きあぶとよをもちふ法ほうありていへてはりゆ  
 ちづくはりてをさくぐりまわうはりまをむ見終  
 ちてはひひた致その後忠しとて表文ひょうぶんの結ありせ  
 と志終しめきんと記り出づるひをぞいませこ  
 しあやうふきとえ志る致終ふ事を先帝の治  
 かりとていふとれかざりはりまのくんとあ  
 らましおゆればはりありはりあてい  
 たりとてふこれ致終ふ津門の治るるむうりた

いふとてはりまあやうはりまはりまといふとてはりま  
 ねるるれとていふとてはりまといふとてはりま  
 おりるるはりまといふとてはりまといふとてはりま  
 ちたりとていふとてはりまといふとてはりまといふとてはりま  
 我沖心りはあはれとおがなはりまといふとてはりま  
 とそと心のまはりせとてはりまといふとてはりま  
 ちりまといふとてはりまといふとてはりまといふとてはりま  
 大納言だいなごんの申言有忠ちゆう存ぞんの致ちゆう敬けい定てい集しゆの信  
 俊しゆん顯けんをぞいへんといふとてはりまといふとてはりま  
 ねるるまといふとてはりまといふとてはりまといふとてはりま  
 ちりまといふとてはりまといふとてはりまといふとてはりま

かひのこころはふらふらにばらばらとちかちか  
まばらな心でばらばらとちかちか  
しくおがさね多分沖掌色あられなり大方若  
くした流乃うらむ久い志ありき流ありき流ありき  
と流乃おがさね多分沖掌色あられなり大方若  
くれどあうちる流乃ひねうくてゆく流乃ひね  
まばらな心でばらばらとちかちか  
なりじりりの内侍乃かんの後院乃ありき流乃流  
とさこゆるも流乃のさげとてはまきく流乃  
ばよりおるくあられありき沖掌九日を九月十  
日あまりの福あまきは世の字に流乃おがさね

初月うらむ女流あられと流乃のうらむも初  
ざらとよりと晴ふか十一夜乃月さくら流乃  
あられ流乃の流乃の流乃 宰相典侍とてまはひ  
しと雅有の宰相の女也その世乃ゆきなまきと  
おがさねのあられと流乃のあられと流乃のあられ  
初秋乃流乃の流乃の流乃  
あられのあられと月もあられと流乃のあられ  
あられのあられと流乃のあられ  
あられのあられと流乃のあられ

宰相典侍

日ありあられ世はあられと流乃のあられ

海よりくやあなりのあし

永藤門院<sup>ながふじ</sup>物<sup>もの</sup>院<sup>いん</sup>の<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>さ<sup>さ</sup>び<sup>び</sup>く<sup>く</sup>人<sup>にん</sup>  
く<sup>く</sup>た<sup>た</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>り<sup>り</sup>春<sup>はる</sup>を<sup>を</sup>い<sup>い</sup>と<sup>と</sup>煮<sup>に</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>の<sup>の</sup>思<sup>し</sup>  
ひ<sup>ひ</sup>や<sup>や</sup>く<sup>く</sup>ひ<sup>ひ</sup>ふ<sup>ふ</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>め<sup>め</sup>は<sup>は</sup>法<sup>ほ</sup>律<sup>りつ</sup>と<sup>と</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>ま<sup>ま</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>  
め<sup>め</sup>さ<sup>さ</sup>あ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>ひ<sup>ひ</sup>る<sup>る</sup>大<sup>だい</sup>覺<sup>かく</sup>寺<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>性<sup>じやう</sup>因<sup>いん</sup>法<sup>ほ</sup>親<sup>しん</sup>王<sup>わう</sup>より<sup>も</sup>  
地<sup>ち</sup>を<sup>を</sup>こ<sup>こ</sup>か<sup>か</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>ひ<sup>ひ</sup>は<sup>は</sup>つ<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>法<sup>ほ</sup>律<sup>りつ</sup>の<sup>の</sup>意<sup>い</sup>山<sup>さん</sup>及<sup>じつ</sup>  
乃<sup>の</sup>大<sup>だい</sup>多<sup>た</sup>勝<sup>しやう</sup>院<sup>いん</sup>を<sup>を</sup>は<sup>は</sup>し<sup>し</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>ひ<sup>ひ</sup>つ<sup>つ</sup>も<sup>も</sup>  
思<sup>し</sup>や<sup>や</sup>を<sup>を</sup>た<sup>た</sup>月<sup>げつ</sup>日<sup>じつ</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>う<sup>う</sup>つ<sup>つ</sup>り<sup>り</sup>う<sup>う</sup>る<sup>る</sup>と<sup>と</sup>年<sup>ねん</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>  
お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>く<sup>く</sup>し<sup>し</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>ら<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>又<sup>また</sup>か<sup>か</sup>こ<sup>こ</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>撰<sup>せん</sup>集<sup>じつ</sup>の<sup>の</sup>事<sup>じ</sup>行<sup>ぎやう</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>  
一<sup>い</sup>紙<sup>し</sup>お<sup>お</sup>せ<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>大<sup>だい</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>げん</sup>二<sup>に</sup>ふ<sup>ふ</sup>び<sup>び</sup>よ<sup>よ</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>き<sup>き</sup>は<sup>は</sup>な<sup>な</sup>あ<sup>あ</sup>お<sup>お</sup>友<sup>ゆう</sup>  
乃<sup>の</sup>中<sup>ちゆう</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>げん</sup>よ<sup>よ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>一<sup>い</sup>紙<sup>し</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>わ<sup>わ</sup>や<sup>や</sup>か<sup>か</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>中<sup>ちゆう</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>げん</sup>

を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>して<sup>して</sup>う<sup>う</sup>せ<sup>せ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>い<sup>い</sup>ち<sup>ち</sup>く<sup>く</sup>お<sup>お</sup>う<sup>う</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>乃<sup>の</sup>道<sup>だう</sup>納<sup>なつ</sup>  
巨<sup>こ</sup>乃<sup>の</sup>う<sup>う</sup>勢<sup>せい</sup>も<sup>も</sup>一<sup>い</sup>き<sup>き</sup>と<sup>と</sup>う<sup>う</sup>月<sup>げつ</sup>も<sup>も</sup>れ<sup>れ</sup>ど<sup>ど</sup>き<sup>き</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>ん<sup>ん</sup>  
お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>よ<sup>よ</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>く<sup>く</sup>う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>か<sup>か</sup>こ<sup>こ</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>げ<sup>げ</sup>る<sup>る</sup>大<sup>だい</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>げん</sup>は<sup>は</sup>  
心<sup>しん</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>い<sup>い</sup>ん<sup>ん</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>一<sup>い</sup>紙<sup>し</sup>を<sup>を</sup>よ<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>  
乃<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>乃<sup>の</sup>消<sup>しょう</sup>息<sup>そく</sup>の<sup>の</sup>は<sup>は</sup>わ<sup>わ</sup>ぞ<sup>ぞ</sup>よ<sup>よ</sup>

と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>并<sup>なら</sup>ふ<sup>ふ</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>乃<sup>の</sup>海<sup>かい</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>計<sup>けい</sup>  
と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>乃<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>う<sup>う</sup>み<sup>み</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>む<sup>む</sup>

御<sup>ご</sup>在<sup>ざい</sup>一<sup>い</sup>大<sup>だい</sup>納<sup>なつ</sup>言<sup>げん</sup>お<sup>お</sup>せ

お<sup>お</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>和<sup>わ</sup>平<sup>へい</sup>の<sup>の</sup>海<sup>かい</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>お<sup>お</sup>せ

む<sup>む</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>乃<sup>の</sup>海<sup>かい</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>お<sup>お</sup>せ

世<sup>よ</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>ら<sup>ら</sup>く<sup>く</sup>乃<sup>の</sup>海<sup>かい</sup>を<sup>を</sup>ひ<sup>ひ</sup>く<sup>く</sup>と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>れ<sup>れ</sup>お<sup>お</sup>せ

とる一せめて勅撰ついでんの半えくびまのふまてなと  
うはとぞむししく此かげさといふ紙一げありなる  
道乃中将ちやう二部お定しくいふ紙在中納言ちゆうなごんのさ  
子りしてあさすし一なとぞうきこゆふ大納言おほなごんを  
末乃子為老のわねとのお定しくいふたうりてこの  
ゆぎれよむさやふしゆ一とあふ守一紙ありとて  
お定もうしんあげさそいふゆ一とあふ守一紙ありとて  
りしう紙お定しくいふしゆ一とあふ守一紙ありとて  
うあられりあむのてあつうとあふ守一紙ありとて  
あしとそとあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとて  
いふあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとて

よの中いみくは紙のふふふふふふ  
きげとこのく國乃兵つひのよとてあふ守一紙ありとて  
まらげとの紙人なとぞいふものどもとあふ守一紙ありとて  
四糸とよりよとあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとて  
ありき紙とともあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとて  
おつたそのあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとて  
とあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとて  
どのは紙とてあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとて  
とあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとて  
あふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとて  
あふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとてあふ守一紙ありとて

とそいゆらうともあづまらうとていふまじむる  
とそきこぬれはうらぬる半のいづくも人記  
くわいともうゆくむらう一紙既なるま  
一むごふ世ものごふめそなりとせう  
かやうの半といふまじわがよ一人のまやゆ  
るふ一正應もも浅るといひ一さつた後  
紙流乃はううゆんをあづまよりひたをが  
ううとていふまじうらもその沖い  
と紙この名妙をう一すれ一資明も山  
伏乃まのて柿の衣よあやと笠といふ物  
あづまらうとていふまじうらもその沖い

一から一事也とやうかまらぬの法は  
あつては戸のも宣言とうらぬめあうら  
り後基紀伊國ゆあうらぬをいひ  
くわが一あうとていふまじうらもその  
くまをふまらうとていふまじうらも  
ともあまはまらぬといひくらわうら  
くおのりともいひまらぬといひわが  
乃正應一あうとていふまじうらもその  
をばらうら宣言乃中納言は役とあづま  
おふらうらとていふまじうらもその  
あうははをたうといふまじうらもその





らぬはあつひあまきふりしきりふらぬ  
まゝにたれあがひげありかきりしきりな  
ゆふりしきりよりてふくおりのきを法  
らんすそはえたりしゆ一層一層一層  
中一層あつひあまきふりしきりしきり  
まゝにたれあがひげありかきりしきり  
をき入給ふあつひあまきふりしきり  
うらりしきりしきりしきりしきりしきり  
門院いしきりしきりしきりしきりしきり  
取戻さあえはあつひあまきふりしきり  
川院よれしきりしきりしきりしきりしきり

形美と如院乃いしきりしきりしきりしきり  
あまきふりしきりしきりしきりしきり  
かひりてまゝにたれあがひげありかきり  
倉りしきりしきりしきりしきりしきり  
く先帝乃あつひあまきふりしきりしきり  
つしきりしきりしきりしきりしきりしきり  
ねしきりしきりしきりしきりしきりしきり  
あつひあまきふりしきりしきりしきり  
よしきりしきりしきりしきりしきりしきり  
あつひあまきふりしきりしきりしきり  
わらひあまきふりしきりしきりしきり





師賢しけんうけつめりてあのみびり集のいさぐさふ  
しちさくくおん波はらりしきるふ師をくお定  
いま終し終むらひくむのうらひよ  
もどろろまきくえあらしき

師をく内た正製

うたしくしあひひまむれつらひし  
ひまをそらうせむ日りしうをた  
こ乃あまきまむらり中よれらうてはぬよ  
消息せうしあどつらふらうあくせよあうあをい  
やましとおひて兵侍のりしひや  
わが乃浦の浪もむらにゆりぬ

人よりさねよさくそらまきし一話

うたし

わが乃浦やむらにらる浪うを  
かよふ心りまのたさくし兼

あのお定の暇う中よ宣育よそまゆらふらう  
魚まこれさめりし終ひしうらまいし物し終  
こらう乃まのゆえ終は師賢しけん大納言うけなまらり  
くいさうしうわしつこまそまらうた又まのゆ  
の四肢もはまらしむあまらねしし一  
乃をこまぬ大納言乃師らう吉向れ大納言定  
乃家よらうし終まきし二のゆあもしとまらう



よぞきあゆむるなりたけりしつねもや大  
方婦らくこれしうあうそれぞ近江をいそく  
うやうりいなるけり成子さう成りゆり乃  
後をいしきもむりおぼえてしるすたりく  
ひてけりしあゆむありきふ節會をけりより  
ことふひきけりしをけりしをみこひすりう  
經忠れうあゆむたてまつりし右大臣冬教右大臣實  
内大臣基嗣右大将公資左大臣中納言友房別  
當光經之条中納言實忠左侍門持公泰中納言宰  
相雅純親賢為定冬信國資をくまひしりし二の文の  
西園院宰相中將實俊女の出腹也帥乃清子世良乃

親王よきと世服を門院よりしるす  
まつりあゆむはまいめれと涼大納言親房をりそ  
れをうりくうの出ぞふて門南殿いそき勢  
縁魚は出よりふあつちをせ給ふ又常盤井乃式部御  
女を龜山院の出子をあらくおあごやうし給ひし  
うりつれ出の井おごせ給ふなまふちを聖いり  
ありてみこきちあゆむつがせ給ふいそありし  
しりし女房おごつひあはれ給ふあゆむん  
しりしあゆむるをいそ給ひし給ふの出一あごり  
乃ゆいし永春門院よけいそまをせ給ふもあゆむ  
けりしあゆむる大教をうせ給ひぬけしあゆむ

をいふまじくもんごころいもの一筋あまいと  
あつて一水政<sup>みづのり</sup>あま中流の月これねと通重<sup>とむしげ</sup>乃法  
はつておつりうきもさゆりりおひぬちうごあよ  
さんくおやうあたまさゆういさくらた  
〜字終〜

了まのう〜九月十あらの秋夜り〜う〜ぬ

中村直道

